

# 西川伸一の オススメシネマ 20

なんでこんなにオッサンばかりなのか。これが見終えて最も印象づけられたことである。石川県では多選知事が続いてきた。前々知事の中西陽一が八選、前知事の谷本正憲が七選である。その谷本の七期目が本ドキュメンタリー作品のテーマになっている。

居並ぶ県庁幹部に谷本が握手していく。オッサンしかない。県議会の議員たちも同様で、

21

## 裸のムラ (日・2022)



彼らは知事の話など聞かずに雑談していたり居眠りしていたりする。壇上に座る県庁幹部たちも居眠りしている。緊張感のかけらもない。多選の弊害が一目瞭然である。

谷本は八選をあきらめ、馳浩前衆院議員に後事を託した。馳は知事選の出陣式で壇上に立つ半数は女性にしたと胸を張った。これが自分の目指す石川新時代の象徴だと。そして馳は当選

する。当選を祝って女性たちが花束を馳に手渡す。ただ、それだけで彼女たちは壇上から去り、あとにはオッサンだけが残った。本音が透ける。女性の県職員が県議会開会前の無人の議場で、知事の席に水差しを丁寧に拭いてセットする長回しのシーンが、対照的で効いている。

こんな惰性と同調圧力に満ちた「空気」にあらがう人びとが、本作の「裏テーマ」である。

一つはムスリムの家族である。ある男性がインドネシアに留学しそこで出会ったムスリムの女性と結婚し、ムスリムとなって金沢市に所帯をもった。三人の子どもたちもちろんムスリムである。金沢には県内唯一のモスクがあり、彼らはそこに通う。夫は公安調査庁から、モスクに集まるムスリムたちの情報を定期的に伝えるスパイ役を持ちかけられたとい

う。「断りました」と彼は笑い飛ばす。ウクライナ戦争のニュースをテレビで見ていた妻が、パレスチナでムスリムが抵抗に立ち上がるとテロリストと言われると報道姿勢を批判する。確かに二重基準だと深く納得した。

もう一つは二組の「バンライフアー」である。「バン(VAN)」と「ライフ(LIFE)」をつなげた造語で、車中で寝泊まりし仕事もこな

す人びとを指している。一組目は県内の自宅とクルマでの生活をかけもちする家族で、夫の仕事は安定している。もう一組は四〇代後半で退職した夫の退職金で車中暮らしをする家族である。無収入ののだが映画『ノマドランド』(アメリカ・二〇二〇)で描かれたような悲壮感はない。

周りに合わせて自分を「作る」のは疲れると夫が言えば、貯金が尽きてはじめて次の人生に取りかかれる気がすると妻は言う。バンとの比較が意識されているよう。本作の冒頭とラストには知事を送迎する黒塗りの公用車が登場する。

監督は映画『はりぼて』(二〇二〇)と同じ五百旗頭幸男である。富山のチューリップテレビから石川テレビ放送に移って制作した。前作では富山市のオヤジ市政にあぐりさせられたが、隣県の県政もやはり同じだった。ラスト近くではそれを物語る映像が遡及的に流され、森喜朗首相の妄言、さらには谷本初当選のシーンに至る。必勝日の丸はちまきが気色悪い。ムスリムと「バンライフアー」という対極的な軸が設定される。だかららびこるオッサンの「ムラ」意識が際立つ。その異形さを見せつけることこそ監督の狙いなのだろう。

(二〇二二年一月二日・ポレポレ東中野)  
(にしかわ・しんいち/明治大学教授)